
シラヌイ

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シラヌイ

【コード】

N7032K

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

二代目カンレキが、襲名し始めて、新たな戦いが始まる。

第一話 始まりと二代目の謎(前書き)

シラヌイとカンレキ、見比べてください。とても面白いので比較した後、何処がどう違うかを簡潔に感想に書いてくだされば幸いです。

第一話 始まりと二代目の謎

元素112柱代表、アスタチン。

「前の、カンレキは、引退した。二代目が襲名する恐れがあります。」

「

新人、コペルニシウムは、レントゲニウムに質問した。

「貴方は、どれぐらいの部隊を持つことになるのですか？」

「ざっと、75の部隊を持つことになるな。」

コバルトは、今回の実行者。

彼は、80の部隊。

そのうちの一つの舞台のリーダー、ロンヴ二代目がいた。

二代目カンレキは、まだ現れない。

二代目ロンヴは、コバルトに話しかけた。

「カンレキは、おそらく現役でしょ。」

「二代目は、いないということか。」

しかし、二代目カンレキは、存在していた。

それは、シラヌイであった。

第一話 始まりと二代目の謎（後書き）

次回は、第二話シラヌイは二代目カンレキだ！

第二話 シラヌイは二代目カンレキだ！（前書き）

シラヌイを探そうとしている二代目ロンヴ。

第二話 シラヌイは二代目カンレキだ！

二代目ロンヴは、いらついていた。

「お前ら4人で、二代目カンレキを探せ。探したら即効殺せ。」

初代カンレキは、特大長という正義軍団のトップになっている。

正義軍団の階級は、特大長、大長、中長、小長、大部佐、中部佐、小部佐、外道3部、外道2部、外道1部となっている。

シラヌイは、大部佐という階級である。

シラヌイは、変形するとロケット型戦闘機になる。

どうやら、趣味でカンレキに修業させてもらったらしい。

「ロンヴの奴、甚だしいと思わないのか？」

「来たぞ、愚かな正義軍団。」

「やるぜー！」

4体が、一斉に攻撃した。

その最中に、シラヌイが、ロンヴの部下の部下を攻撃していた。

「カンレキ師匠、敵が多い気がします。」

「シラヌイ、お困りなら助立ちをする。」

正義軍団の基地から、キューブ型ミサイルを100発、発射した。

その後、4体の部下が気が付いた。

やばい、あの中にシラヌイがいた。

第二話 シラヌイは二代目カンレキだ！（後書き）

次回は、第二話シラヌイのパワー。お楽しみに

第三話 シラヌイのパワー（前書き）

シラヌイの力、恐るべし。

第三話 シラヌイのパワー

「シラヌイの野郎が、此処にいたとは。」

四体の部下が、襲ってきた。

シラヌイは、ロングカノン砲でビームを発射した。

四体全員が全滅した。

シラヌイは、カンレキに連絡した。

「あー、シラヌイどうした。」

「カンレキ師匠、敵軍の影が映ってきます。」

「敵のリーダーは、誰だ？」

「二代目ロンヴです。」

「二代目ロンヴは、コバルトに従う者だ。階級は、大部佐。」

「部下を4体いました。」

「ロンヴの部下の階級は、イチモクノンは、外道三部。ナナセブンは、外道二部。コーマは、中部佐。キリマサリニームブは、外道二部。最後に、リオンナイドヴェグは、小部佐。ということだ。」

シラヌイは、ロンヴと戦う準備を整えた。

第三話 シラヌイのパワー（後書き）

次回は、第四話 二代目ロンヴのつらい闘。お楽しみに

第四話 二代目ロンズのつらい罫(前書き)

シラヌイは、それに引っ掛かってしまっが？

第四話 二代目ロンヴのつらい罠

シラヌイは、二代目ロンヴを攻撃をしようとしていた。

二代目ロンヴは、瞬間的に消えた。

「なにつ、消えやがった。」

二代目ロンヴにとって、シラヌイは、厄介な敵であった。

今回は、罠を放たれた。

シラヌイにとって大ピンチである。

カンレキは、二代目ロンヴの動きを読もうとしていた。

「シラヌイ、動きが速いぞ。解析できるか？」

「解析してみます。二代目ロンヴの速度は、音速と同じスピードです。」

「シラヌイ、避けていてくれ。此処は私がやる。」

カンレキの思いもよらぬ作戦とは一体？

次回に続く！

第四話 二代目ロンズのつらい闘(後書き)

次回は、第五話 カンレキの最高作戦。お楽しみに

第五話 カンレキの最高作戦

カンレキがくるまで待っていた。

シラヌイは、敵軍から300光年離れた。

敵軍が散らばり始めた。

「カンレキ師匠は、少し見ているのかな？」

シラヌイは、しばらくしているとカンレキ師匠を見つけた。

「敵軍は、何処にいるんだ？」

「あそこです。」

「敵軍が、こっちに近づいてくるぞ。」

敵軍は、二代目ロンヴとともに移動していた。

カンレキは、すごい作戦を思いついた。

「シラヌイ、良い作戦が思いついた。」

「それは何ですか？」

「とても良い誘導作戦だ。」

「やってみます。」

二代目ロンヴは、追いかけてきた。

第五話 カンレキの最高作戦（後書き）

次回は、第六話 相手に与えた絶望感。お楽しみに

第六話 相手に与えた絶望感

シラヌイとカンレキは、二代目ロンヴが来たことによしっと思った。

なぜなら、簡単に狙い定められるのに良い作戦を考え付いている。

「相手を絶望にさせる方法はもう知っているかな？シラヌイ。」

「カンレキ殿が教えた通りにすればよいでしょうか？」

「その通りだ、一緒にやるぞ。」

「了解。」

二代目ロンヴは、カンレキの姿を見て攻撃の準備を整えていた。

シラヌイは、針型のミサイルを1000発撃った。

二代目ロンヴは、大ダメージを食らった。

「くそ、相手は一体どこなんだ？」

カンレキは、キューブ型のミサイルを50発、二代目ロンヴに攻撃した。

二代目ロンヴの体が少しずつ壊れかけていた。

カンレキとシラヌイは、じっと見つめていた。

「次の手を撃つぞ。シラヌイ！」

「分かりましたカンレキ殿。」

第六話 相手に与えた絶望感（後書き）

次回、第七話 シラヌイの勝利。お楽しみに

第七話 シラヌイの勝利（前書き）

面白い展開になっています。

第七話 シラヌイの勝利

カンレキとシラヌイは、じっと見つめていた。

二代目ロンヴにとっては、相当な屈辱。

「貴様等、これ以上攻撃をするのなら容赦はしない。ぶっ殺してくれる！」

二代目ロンヴは、叫んだ。

カンレキとシラヌイにとっては、それは合図でもあった。

「行くぞ、シラヌイ！」

「了解、カンレキ殿！」

手鏡型ミサイルをカンレキ、シラヌイ其々、30発発射した。

二代目ロンヴは、避けようとしていたが、よけきれず襲われて跡形もなく消えた。

この結果、元素112柱は、研究会を実施することにした。

「もつと強い者はおらんのか？」

「強い奴なら俺のところにあります。」

「それは一体誰なんだイリジウム？」

「8000・ボクリシヨウです。」

「そいつは、どれぐらいの攻撃力だ？」

「シラヌイ以上カンレキ未満です。」

「ならいいだろう。そいつに任務書を出してこい。」

「了解！」

「元素112柱は何を企んでいるのだろうか？」

シラヌイは、まだ気づきもしなかった。

第七話 シラヌイの勝利（後書き）

次回は、第八話 8000 - ボクリシヨウは超強い。お楽しみに

第八話 8000 - ボクリシヨウは超強い

任務書を渡された8000 - ボクリシヨウはもの凄い喜びとともに鍛えることを宣言した。

ロボットである為、肉体を鍛えるという意味は、通用するのだろうか？

シラヌイは、惑星カトリーゼのパトロールをしていた。

「変身！」

戦闘機からロボットに変形したシラヌイは、暴走列車を食い止めた。

「ヒーローっていうのも、結構面白いね。」

シラヌイは、一件が落着くとロボットから戦闘機に変形して、惑星を出た。

しかし、シラヌイから3億？離れているところに小型戦闘ロボットと8000 - ボクリシヨウがいた。

「小型ロボットたちよ。先にシラヌイを見つけてこい。ただし殺すんじゃないぞ。俺がたっぷりいたぶってやるからな。」

「了解しました。」

8000 - ボクリシヨウは、笑っていた。

シラヌイは、50mの小天体の裏側に隠れた。

小型ロボットの存在に気付いたのである。

「なんでこんなところにいるんだ？」

小型ロボットの気を紛らわすため、小天体のところで待機をしていた。

戦闘機からロボットに変形して、戦闘態勢に入り始めたシラヌイ。

8000 - ボクリシヨウがやってきてしまった。

「馬鹿者！もつと探せ小天体のところにいるかもしれないぞ。」

シラヌイの位置がばれてしまった。

第八話 8000 - ポクリシヨウは超強い(後書き)

次回 第九話 フォーメーションA。お楽しみに

第九話 フォーメーションA（前書き）

8000 - ボクリシヨウを撃退する力は見つかるのか？

第九話　フォーメーションA

シラヌイは、必死に逃げた。

8000 - ボクリシヨウは、小型ロボットに命令をした。

「シラヌイを捕まえる！ただし殺すな！俺がいたぶってやるからな。」

小型ロボット達は、シラヌイに近づいた。

シラヌイは、アルファフォースを利用した。

「何だあれは？」

シラヌイのアルファフォースは、小型ロボットを一掃した。

8000 - ボクリシヨウは槍を投げた。

シラヌイのアルファフォースは、その槍を砕くほど硬いシールドの役割を果たした。

「なんだその力は？」

シラヌイは、8000 - ボクリシヨウに言った。

「此の力にお前の力は相当しない。お前が降参するのなら、俺はお前に手錠を掛ける。」

シラヌイは、ミサイルを放った。

これもまた、アルファフォースによって塞がれた。

「畜生、貴様を生きた状態でゼンジュロン様に渡すつもりだったが、ここで殺してくれる。」

シラヌイは、右肩にあるバズーカをソードにした。

「これで、君の行動を見切る。シラヌイセイバー！」

8000 - ボクリシヨウにとって彼は脅威である。

第九話 フォーメーションA（後書き）

次回 第十話 信じられない行動。お楽しみに

第十話 信じられない行動

80000 - ボクリシヨウは、シラヌイに襲いかかった。

シラヌイセイバーが勢いよく、80000 - ボクリシヨウの身体を削った。

「くそ、こいつめ。」

シラヌイは、アルファフォースを使って見事に色々な攻撃から身を守っていた。

「このまま、一気に攻めるか。」

冷静に80000 - ボクリシヨウの行動も読んでいるシラヌイには怖い者はいないのである。

「これでボクリシヨウの右腕を破損させることができれば容易なんだが？」

アルファフォースが斧の形になった。

80000 - ボクリシヨウは、右腕にパワーをためてシラヌイを殴ろうと瞬間、80000 - ボクリシヨウの右腕の部分が切断された。

シラヌイは、80000 - ボクリシヨウかびびっているところを左腕に手錠をかけた。

「しまった!」

「これでチェックメイトだ。」

第十話 信じられない行動（後書き）

次回 第十一話 厄介な敵とその軍団図。お楽しみに

第十一話 厄介な敵とその軍団図(前書き)

感想くれたら幸いです。

第十一話 厄介な敵とその軍団図

シラヌイは、元の基地に戻ってカンレキと出会った。

「カンレキ殿、何かわかったことがあるって本当ですか？」

「ああ、シラヌイこれを見てくれ。」

一つのデータがシラヌイの目の前に置かれた。

「これは、一体？」

「ネメシスデイセプティコンのデータだ。リーダーは、デスカイダから菅 湯というものになっている。君が今まで戦っていたのは、第六軍である。」

「つまり、第六軍をうまく殲滅すれば良いことですか？」

「そう簡単に殲滅は無理だ。第六軍のリーダーが厄介らしい。」

「それはなぜですか？」

「実は、第六軍のリーダーは、相当気が荒いらしく、部下にたいしてただの荒く使っても壊れないチェスの駒のように扱っているようだ。」

「それは、ひどいことですね。」

しかし、此のリーダーに関しては、厄介な力を持っていた。アルフ

アフオースではなく、ヘッドマスター&ターゲットマスターであることである。

シラヌイには、まだアルファフォースを覚醒させていない事や相棒がいないということがかなり問題を引き起こしていく可能性があるということである。

「此の大群は、カンレキ司令官。ネメシスディセプティコンの集団がサイバトロロン星に攻めてきます。」

「シラヌイよ。アルファフォースを完全開放して覚醒するのだ。」

「僕にそんなことができるのでしょうか？」

「君になら、その強さでいける。」

第十一話 厄介な敵とその軍団図（後書き）

次回 第十二話 シラヌイ覚醒。お楽しみに

第十二話 シラヌイ覚醒(前書き)

アルファフォースを全開にしたシラヌイ。

第十二話 シラヌイ覚醒

「君になら、その強さでいける。」

そう言われたシラヌイは、戸惑いながらも考えを怠らなかつた。

「シラヌイ殿、敵に近づいています。」

「ああ、全員戦闘準備を用意しろ。敵より先に攻撃した方が一番の得策だ！」

敵軍は、第六軍のリーダーと一緒にいた。

「お前等、オートボットの攻撃態勢を確認したか？」

「どうやら、攻撃スタンバイを完了しているようです。」

「馬鹿野郎！いいさ、一気に殲滅してやる。こちらも攻撃態勢スタンバイだ！」

「了解。」

ネメシス・オートは、スガーユに交信していた。

「どうしたネメシス・オート？」

「オートボットの奴等、総攻撃で攻めてきます。」

一方、シラヌイは……

「シラヌイ、アルファフォース完全開放！シラヌイスーパーモード！」

カンレキは、ハバロンとヨズプライムと合体して、大型戦士になっていた。

敵を倒すためには、戦略が命懸けになる。

第六軍との激突が熱くなりそうだ。

第十二話 シラヌイ覚醒（後書き）

次回 第十三話 第六軍の副リーダー。お楽しみに

第十三話 第六軍の副リーダー（前書き）

シラヌイとカンレキのパワーが第六軍に響く。

第十三話 第六軍の副リーダー

第六軍は、ネメシス・オートの命令をきかないかぎり行動を取らないと思われていたが……

「あいつら、攻撃を仕掛けてきましたよ。」

どうも、副リーダーが攻撃命令を出しているようだ。

第六軍副リーダー、メルトワークは、第六軍の戦士達に命令を出していた。

「リーダーの代わりだ。撃て！」

シラヌイとカンレキは、第六軍の戦艦をぶち破って現れた。

敵は、シラヌイを見つけて攻撃しようとしたが、冷静なるアルファフォースで敵を沈めた。

カンレキは、メルトワークと闘いを始めた。

「死ね、カンレキ！」

「一気に落とされるわけにはいかない。」

シラヌイは、ネメシス・オートを見つけた。

「貴様等、オートボットなんか皆殺しだ！覚悟しやがれ！」

「冷静なるアルファフォースよ。私に最高のキャノン砲を持たせて
まえ。」

シラヌイは、キャノン砲を手にした。

カンレキも苦戦しながら戦っていた。

第十三話 第六軍の副リーダー（後書き）

次回 第十四話 第六軍壊滅。お楽しみに。もうひとつ次回で第六軍篇が終わります。

第十四話 第六軍壊滅（前書き）

第六軍篇がこれで終わります。次は、第九軍篇に突入します。

第十四話 第六軍壊滅

カンレキもメルトウークの攻撃をアルファフォースを使って、盾にしたり攻撃を繰り返していた。

「貴様なんか、すぐにあの世に送ってやるから抵抗するな。」

カンレキは、アルファフォースをメルトウークにぶつけた。

メルトウークは、身体が粉々になった、

一方、シラヌイは……

ネメシス・オートは、シラヌイのアルファフォースで作り上げたキヤノン砲を見ていた。

「冷静なるアルファフォースの力を見せてやる。」

シラヌイは、キヤノン砲を発砲した。

ネメシス・オートは、避けていたが、被弾してしまった。

顔が半分無くなっていた。

ネメシス・オートは意識が薄くなっていた。

そして、彼はオートボットの九人に身柄を拘束された。

シラヌイとカンレキは、そのあと別れた。

第十四話 第六軍壊滅（後書き）

次回 第十五話 シラヌイに迫りくる影。お楽しみに

第十五話 シラヌイに迫りくる影（前書き）

シラヌイに近づいてくるものは。結構短いです。

第十五話 シラヌイに迫りくる影

シラヌイは、つかの間の休憩をとっていた。

「敵の確認をしとかなければな。」

シラヌイは変形して、そこら中を飛び回った。

シラヌイはある反応に気がついた。

「ヴィーコン軍団だな。よしっ1分で決着付けてやる!」

シラヌイは、ミサイルを10発撃った。

ヴィーコンは、次第に数を増していた。

中には、変形してシラヌイに襲いかかった。

「トランスフォーム! シラヌイブレード!」

ヴィーコン軍団を次々と一刀両断していった。

「数が多い。」

シラヌイを追いかける謎の影が一つだけあった。

「あのお方をあのままにはいけない。」

第十五話 シラヌイに迫りくる影（後書き）

次回 第十六話 シラヌイの相棒誕生。お楽しみに！

第十六話 シラヌイの相棒誕生（前書き）

シラヌイに相棒が、そしてテラーコン50体が襲来。

第十六話 シラヌイの相棒誕生

シラヌイブレードを右腕に持って戦っているシラヌイは、次第にま
ずい状態になっていることに気がついた。

「数が多すぎて、きりがない。」

シラヌイは、赤紫色の閃光がヴィーコン軍団をつぶしているところ
を目撃した。

「何だ？」

「あなたのサイドに就く、アラートと申します。どうぞよろしくお
願いします。」

シラヌイは、ヴィーコンの生き残りを見つけた。

「気をつける。まだ生き残りがいる。」

「シラヌイ様、一緒に戦いましょう。」

「ああ。」

シラヌイとアラートは、ヴィーコンを片づけた。

だが、ヴィーコン以外にもテラーコンがいることにまだ気がつか
ない。

「どうやら、シラヌイに相棒ができたようだな。」

ニビリアは、第五軍に連絡をした。

「窓際部隊が、何の用だ。」

「シラヌイに相棒ができたみたいだ。気をつけろ！」

「ご忠告、ありがとう。窓際部隊の一人、ただしお前は来るな！」

第五軍リーダー、ファイアキルドは、ニビリアのことが大嫌いらしい。

第十六話 シラヌイの相棒誕生（後書き）

次回 第十七話 危険信号！第五軍の作戦。お楽しみに！次回は、ファイアキルドとニビリアがなぜ、犬猿の仲なのか？という過去話が出てきます。

第十七話 危険信号！第五軍の作戦（前書き）

ファイアキルドとニビリアの関係が明らかになりました！短めです。

第十七話 危険信号！第五軍の作戦

シラヌイとアラートは、テラーコンやヴィーコン集団を一掃していた。

「これで全部だな。」

シラヌイとアラートは、一服をすることにした。

ファイアキルドは、仲間を連れていた。

「ファイアキルド殿、なぜ、ニビリアという阿呆と犬猿の仲なんですか？」

ファイアキルドの部下の一人、スピードストームが話した。

「大体、お前な重箱の隅を突くような質問するなよ！」

「すみません。でも気になってしまいます。」

「しょうがない。理由は、ただ一つ、もつれによる喧嘩だよ。」

ネメシスディセプティコンの仲間がもつれを起こして、喧嘩をしたことが理由で犬猿の仲になるのは、よくあるのだが・・・

それが原因で、ニビリアは、窓際部隊に所属された可能性は大いにありうる。

第十七話 危険信号！第五軍の作戦（後書き）

次回 第十八話 第五軍襲来！。お楽しみに！

第十八話 第五軍襲来！（前書き）

第五軍がサイバトロン星に襲来し始めた。短めです。

第十八話 第五軍襲来！

ファイアキルド率いる第五軍は、サイバトロン星を見ていた。

「この星を我々が攻めるんすか。」

「当たり前だ。リープダイレクト。」

第五軍は11体いる。

それぞれの力が未知数なのが困ることだがシラヌイとアラートにあってどう作戦をとるつもりなのか？

シラヌイとアラートは、サイバトロン星に戻る最中であつた。

「ネメシスディセプティコン第五軍のお出ましのようだ。」

「一気に叩きましょう。」

「ああ、そうしたい。シラヌイスーパーモード！」

アルファフォースの鎧を纏ったシラヌイは、アラートとの作戦で二手に分かれて攻撃する作戦のようだ。

ファイアキルドは、第五軍の10体に命令をした。

「侵略を始める！」

「イエツサー！トランスフォーム！」

シラヌイは、しまったという表情した。

「アラート、作戦変更だ。」

「了解！」

第十八話 第五軍襲来！（後書き）

次回 第十九話 放て！シラヌイハイパーモード。お楽しみに！シラヌイは、アルファフォースと合体するとスーパーモード。アラートと合体するとハイパーモード。両方を合体すると合体するとアルティメットモードになります。

第十九話 放て！シラヌイハイパーモード

「アラート作戦変更だ。」

「了解！」

10体のトランスフォーマーは、テラーコンだ。

そのうち一体リープダイレクトである。

「シラヌイを打ち殺せ！」

「おう！」

テラーコン達は、シラヌイとアラートに発砲しまくった。

弾幕のように飛び交う、攻撃をシラヌイとアラートは、避けまくった。

「くそ、このままでは。」

「シラヌイさん、合体しましょう。」

「アルファフォースよ、アラートと私の力を組み合わせたまえ。」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「シラヌイ！」「アラート！」「リンクアップ！シラヌイハイパー

モード！」

「なに、合体しただと！」

シラヌイハイパーモードに立ち向かった9体のテラーコン。

「死ねえええええ！」

「カタルシス・バースト！」

シラヌイの攻撃が9体のテラーコンをつぶした。

リープダイレクトとファイアキルドは、シラヌイハイパーモードに立ち向かった。

「リードサイン！」「バイオレンス・フューチャー！」

二人のネメシスディセプティコンの攻撃を軽々とよけるシラヌイ。

「お前達に食らわしてやるよ。聖魔天楼衝撃波！」

「まずいぞー！」

ファイアキルドは、瞬時に避けたが、リープダイレクトは、よけきれなかった。

「御助けをー！」

リープダイレクトは、大爆発した。

その衝撃波は、ファイアキルドに当たった。

ファイアキルドの姿がボロボロになっていた。

「くっ、そんな技があつてたまるか!」

「ソウルインパクトクラッシュャー!」

「なにー!」

ファイアキルドは爆発して消滅した。

シラヌイは、リンクオフした。

「よし、戻るか。」

「はいっ!シラヌイさん。」

二人は、トランスフォームして自らの聖地へと帰って行った。

しかし、ニビリアは、何やら企んでいるようだ。

「第五軍、全滅か。ふふふ、面白いことになってきたぞ。」

第十九話 放て！シラヌイハイパーモード（後書き）

次回 第二十話 ニビリアのたくらみ。お楽しみに！次回から、第五軍編がニビリア編になります。

第二十話 ニビリアのたくらみ（前書き）

ニビリア編突入！

第二十話 ニビリアのたくらみ

ニビリアは、エネルギーワインを飲んでいた。

「ニビリア様、スガーユを裏切る準備は？」

「もう少し待て、サイバトロン星を制圧する方法を整理している。」

ニビリアは、部下の一人のヒドラトロンにそう伝えた。

ニクストロンとアポトロンは、会話をしていた。

「シラヌイの奴、着々と進化している。」

「我々の力が届かなくなる可能性大だな。」

ニクストロンの悩みは、それだけでない。

「スガーユを裏切ろうとしているニビリア様をどう思っているのだ？」

「俺には、そんなことを考えている暇があるのならサイバトロン星制圧を考える！」

「アポトロンの言うとおりだな。」

シラヌイ達にとって新たな脅威が近づいていた。

第二十話 ニビリアのたくらみ（後書き）

次回 第二十一話 気安くない。お楽しみに

第二十一話 気安くない

シラヌイとアラートは、サイバトロン星の周りを周回していた。

「敵がないのは、嬉しいことですが……」

「アラート、何か良からぬことが起きると思っっているのか。」

「はい、宇宙がいつもよりも静かすぎるのって怖くありませんかシラヌイさん？」

「確かに。宇宙がいつもよりまして静かすぎる。」

二人の予感は的中した。

アポロトロンとカロントロリアが襲ってきたのである。

シラヌイは、スーパーモードになりカロントロリアに攻撃を仕掛けた。

「私に攻撃するなんて、悪い奴だね。セットオブクラッシャー！」

シラヌイは、攻撃を避けた。

アラートは、アポロトロンの攻撃を避けていた。

「貴様、俺の攻撃を避けるなぞ、五百万年早いわ。」

「そんなに待っていられますか！」

アラートの右拳がアポロトロンに命中した。

第二十一話 気安くない(後書き)

次回 第二十二話 大乱闘始まる。お楽しみに！

第二十二話 大乱闘始まる

「くっ、攻撃が命中した。」

カレントロリアは、シラヌイの動きを止めることに苦戦を強いられていた。

「シラヌイ、あなたが死ねば私達は宇宙を支配できるのだから。」

「ネメシスデイセプティコン貴様等の企みはオートボットが砕く！アラート合体だ。」

「了解！シラヌイ殿。」

「シラヌイ、アラート！リンクアップ！シラヌイハイパーモード！」

「殺っちまえ！」

カレントロリアとアポトロンは、攻撃を開始した。

シラヌイハイパーモードは、攻撃をよけながらアルファフォーで作り上げた弓矢を持っていた。

「アローアルファミックスバースト！」

シラヌイは、弓矢を連続撃ちした。

弾幕の如く飛んでくる弓矢は、アポトロン達の体を貫通させた。

「こんなはずでは・・・」

アポロトロン達は爆発して消えた。

ニビリアは、自分の仲間が2体削られたことに腹を立てていた。

「糞っ！なぜだ？私のどこに欠点がある。シラヌイ殺してやる覚悟しとけ！」

第二十二話 大乱闘始まる（後書き）

次回 第二十三話 ヒドラトロンの。お楽しみに！

第二十三話 ヒドラトロン

シラヌイとアラートは、何かを見つけた。

大きさ15mの小惑星である。

「何かおかしいぞ。アラート!」

「罨ですシラヌイ殿!」

ヒドラトロンが小惑星を砕いてやってきた。

「シラヌイとアラートを確認。ミッドナイトアラートミサイル!」

二人に命中した後、シラヌイとアラートは体勢を立て直した。

「シラヌイ、アラート!リンクアップ!シラヌイハイパーモード!」

「合体したところで何になる。貴様は弱いんだよ!」

赤の閃光がヒドラトロンの左手の指を削ぎ落とした。

「なにっ!」

「次は青の閃光で体を真っ二つにしてやるよ。うりゃー!」

青い閃光がヒドラトロンを真っ二つにした。

そして大爆発して消えた。

ニクストロンは、最後の力となっていた。

第二十三話 ヒドリアトロン(後書き)

次回 第二十四話 ニクストロンの暴走！止めるシラヌイ。お楽しみ！

第二十四話 ニクストロンの暴走！止めるシラヌイ

シラヌイは、ヴィーコンとテラーコンを倒していた。

「アラート、用意はいいか？」

「いつでもオツケーですシラヌイ殿！」

ニクストロンを食い止める作戦に出ていた。

戦いは順調にシラヌイの優勢だったが、アルファフォースの暴走があるとしてハイパーモードから通常形態になった時、ニクストロンがその光を受けてしまい巨大になってしまった。

シラヌイとアラートは、エネルギーキューブを矢に変えた。

「こいつで、一気にアルファフォースに反応させて大爆発させる。」

ニクストロンは暴走し続けていた。

「くっ、動くなよ！」

「アラート、冷静を保てそうすればヒットする。」

「分かった！」

「攻撃開始！」

エネルギーアローは、ニクストロンに当たり大爆発を起こした。

ニクストロンはいなくなった。

ニビリアは、ついに怒りをあらわにした。

「シラヌイ達を皆殺しにする！」

第二十四話 ニクストロンの暴走！止めるシラヌイ（後書き）

次回 第二十五話 最悪の強さ、ニビリア暴走モード。お楽しみに！

第二十五話 最悪の強さ、ニビリア暴走モード

「シラヌイ達を皆殺しにしてやる！」

ニビリアは、怒りを爆発させた。

シラヌイ達は、ニビリアの状況を見た。

「アラート、此処は少しずつ攻撃を加えて行こう。」

「了解しましたシラヌイ殿。」

シラヌイとアラートは、紫の閃光が弾幕のように飛び交うのを見て避けていた。

「こんなに撃ってくるとは。」

「かなり危ないですね。」

「合体して、ハイパーモードになろう。」

「分かった。」

「シラヌイ、アラート！リンクアップ！シラヌイハイパーモード！」

ハイパーモードになったシラヌイだが、ニビリア暴走モードを足止めしにくい状況であった。

「くっ、ハイパーモードでもこの程度なのか。」

「死ね死ね死ね死ね、シラヌイキハハハハハハハハハハ！」

第二十五話 最悪の強さ、ニビリア暴走モード（後書き）

次回第二十六話狂気の笑い声を止める！シラヌイアルティメットモード！。お楽しみに！

第二十六話 狂気の笑い声を止める！シラヌイアルティメットモード！

「シラヌイ、貴様を殺す！キハハハハハハハ！」

紫のビームがシラヌイを襲う。

「このままでは体制が不利だ。」

「落ちれ落ちれ！フィニッシュバースト！」

シラヌイの左肩が一部破損した。

「まずい、アルファフォースの力で相手を吹き飛ばす。」

「死にやがれシラヌイ！」

「シラヌイアルティメットモード！」

「なにつ！」

シラヌイにアルファフォースが一つ合体して出来上がった姿。

その強さははたして吉と出るのか？凶と出るのか？

「不知火火焰濁！」
ししらぬいかえんだく

シラヌイの両肩のキャノン砲から炎のビームが放たれた。

ニビリアに命中して、右手の一部を破壊した。

「畜生！粉々にしてやるびっくりぐらあああああああ！」

シラヌイは、左手から剣を取り出した。

「エリシオンブレード！」

「一気に行くぞ！」

「滅べ滅べ滅べ！」

シラヌイは、剣を振り翳すとニビリアを真っ二つにした。

「これでニビリアは滅んだな。」

第二十六話 狂気の笑い声を止める！シラヌイアルティメットモード！（後書き

次回第二十七話第七軍接近。お楽しみに！

第二十七話 第七軍接近

シラヌイは、アラートともに急いでサイバトロン星に戻ることにした。

第七軍が近づいているからである。

「シラヌイ殿、今回はまずいことになりましたね。」

「ひとまず、第七軍を倒す方法を考えなければな。」

オートボット達を集めたシラヌイは作戦実行の知らせをした。

「いいか、此の作戦で敵軍を落とす。」

「了解！」

シラヌイとアラートは、外を見回すと次第に近づく第七軍。

「アラート、確認してくれ。」

「了解しました。第七軍の数は62万體です。」

「そうか、先ほどの作戦がちょうどよい。」

第二十七話 第七軍接近（後書き）

次回第二十八話シラヌイのある秘策。お楽しみに！

第二十八話 シラヌイのある秘策

シラヌイの作戦は、意外と単純ではあった。

敵軍が気がついた時には、オートボットに囲まれている作戦であった。

しかしこのままでは、敵軍にバレてしまう。

「シラヌイ殿の作戦は良いコンテンツを用意していますね。」

「敵軍が来たぞ！すごい数だ！」

シラヌイは、アルファフォースを使って多彩な方法で敵の数を減らすことにした。

「シラヌイキャノンモード！」

「クラルブレイク！」

「どうわあああああ！」

60万体に減った。

「続いて、シラヌイバリスタモード！」

「オートボットタックル！」

敵を350体仕留めて行った。

「まだまだ、シラヌイスクランブルモード！」

「ライトリングスリリング！」

1万5千体ほど仕留めた。

「よし！俺達もシラヌイに続くぞ。」

「おおー！」

アラートはシラヌイの所に来た。

「アラート、ハイパーモードになることもあるが準備は。」

「いつでもできています。シラヌイ殿。」

第二十八話 シラヌイのある秘策（後書き）

次回 第二十九話 デッドファンクの危険な罠、立ち上がれシラヌイ。お楽しみに！

デッドファンクという初登場のオリトランスフォーマーが登場します。名前通り相手をつかんで死に追いやるという危険な奴です。

第二十九話 デッドファンクの危険な罠、立ち上がれシラヌイ

「シラヌイ」「アラート」「リンクアップ！シラヌイハイパーモード！」

「あれが、シラヌイの力か。俺達は雑魚達を倒すぞ！」

「了解！」

オートボット達は、敵のテラーコン達を排除していた。

デッドファンクというネメシスディセプティコン戦士は、シラヌイハイパーモードを見ていた。

「来たか、ハイパーモード。喰らえデッドデストロイ！」

シラヌイは、軽やかによけようとしたが裏目に出ていた。

「くっ、負けるわけにはいかない。」

シラヌイハイパーモードは熱き闘志を燃やし始めた。

「うおおおおおおおおお！」

アルファフォースが青く輝いた。

「なに！」

「シラヌイアルティメットモード！」

「進化の力を見せただと。無駄なあがきを。」

「アルセクトスーパーバースト！」

デッドフアングに命中して、両腕が消滅した。

「なっ、このままでは……」

「行くぞ、アナザービクトリー！」

デッドフアングは、首だけになり爆発した。

第二十九話 デッドファンクの危険な罠、立ち上がれシラヌイ（後書き）

次回 第三十話第七軍総加勢、カンレキレジェンドモード再び。お楽しみに！

三十話目で、カンレキが再登場します。しかもハバロンとヨズプイムも登場してレジェンドモードにまで覚醒します。勝てる気がしない。

第三十話 第七軍総加勢、カンレキレジェンドモード再び

第七軍の攻撃は続いた。

「くっ、シラヌイ殿の戦いに追い付きたくても。」

シラヌイは、ヴィコーン集団をスーパーモードの状態で数を削っていた。

アラートは、ほかのオートボット戦士と共に戦っていた。

カンレキとヨズプイムとハバロンも参戦しに行くことにした。

「あれだけの数では、きりがない。」

「カンレキ殿、此処はやはり我々も行くしかないですよね。」

「よしっ、こちらのオートボット軍と一緒に戦っぞ。」

「了解！」

アイスヴォリオとブラッドクリームとヘルベルは、シラヌイに襲いかかった。

「アラート、リンクアップだ。」

「了解！」

「シラヌイハイパーモード！」

しかし、3体の攻撃にシラヌイハイパーモードは受けてしまった。

「くっ、しまった。」

「リンクアップするも間もないな。」

「しかし、こっちにならある。」

「カンレキ、ヨズプイム、ハバロン。リンクアップ！カンレキアルティメットモード！」

カンレキは、アルファフォーと合体した。

「カンレキレジェンドモード！」

「何だ？」

「あれが、レジェンドモード。」

カンレキレジェンドモードは、シラヌイハイパーモードの所へ向かった。

「大丈夫か。」

「大丈夫です。カンレキ殿、すごい姿になりましたね。」

「ふふ、君は私の弟子だ。共にディセプティコンをつぶすつではないか。」

「トク」

第三十話 第七軍総加勢、カンレキレジェンドモード再び（後書き）

次回 第三十一話 カンレキ&シラヌイ、絆のオートボットスパーク。お楽しみに！

次回の戦い方がまた見逃せない。どういう展開になるかは楽しみに。

第三十一話 カンレキ&シラヌイ、絆のオートボットスパーク

アイスヴオリオ達は、二人のアルファフォースの使い手との勝負に挑むことになった。

「こいつら、不味いな。カンレキにシラヌイ……」

「どちらも勝てるはずのない相手ですね。」

「だが、やるしかないな。」

「ああ！」

アイスヴオリオ達は、素早い行動でカンレキとシラヌイを混乱させようとした。

「3体がどんなに動き回ろうとも！」

「それを見透かされば、一巻の終わりだ！」

シラヌイ達はアルファフォースの力を一気に振り絞った。

「これがオートボット最高級の力だ！オートボットスパーク！」

電気の形に変わったアルファフォースが、アイスヴオリオ達をしびれさせた。

「ぎゃああああ！まさかこんな力があつたのか。」

「オートボットの力にねじ伏せられる。」

「スガーク様、御助けを！」

三人は、シヨートした後、大爆発した。

「絆の力なら」「どんな敵でも倒せる！」

シラヌイとカンレキは、拳と拳を合わせた。

「スガークという破壊大帝を倒すのだよシラヌイ。」

「師匠の思いに賛同します。」

第三十一話 カンレキ&シラヌイ、絆のオートボットスパーク（後書き）

次回 第三十二話 第七軍リーダー現る。お楽しみに！

第三十二話 第七軍リーダー現る

シラヌイは、カンレキと別れた後、相棒であるアラートにこう告げた。

「そろそろ進化する時かもしれないな。」

「確かに、シラヌイ殿の進化のサポートは自分に任してください。」

「よかるう。共に歩もう。」

「了解！」

シラヌイ達は、第七軍のリーダーを討伐するため、周りにいる弱い敵を倒していった。

第七軍リーダー、マグマブレイング

「シラヌイの奴ら、ついに来よったな。フフフフ。いいおもてなしをしてやる。」

シラヌイは、アラートと合体していた。

マグマブレイングは、最初の仕掛けを用意していた。

「この仕掛けでまずは苦しめる。」

その仕掛けは、強力な電気の流れているケーブルであった。

第三十二話 第七軍リーダー現る（後書き）

次回 第三十三話 シラヌイの怒り、アルファフォー限界突破。
お楽しみに

第三十三話 シラヌイの怒り、アルファフォース限界突破

ケーブルをしかけたマグブレイングはシラヌイ達が引つ掛かるのを待っていた。

シラヌイハイパーモードは、ケーブルに気がつかず絡まってしまった。

「しまった。うわあああああ！」

「ふんっ、そのまましびれて動けなくなったところを殺せばスガ！
コ様が喜ぶであろう。」

シラヌイは、アラートをリンクオフした。

「シラヌイ殿！」

シラヌイは、ケーブルをつかんで捨てた。

「なに？おとなしく死んでいろ！リリースハバブレイク！」

シラヌイのアルファフォースが限界突破して暴走開始始めた。

「アルファバースト・ロンドブレイダー！」

マグブレイングに命中して、左胸の塗装が剥がれ落ちた。

「アルファフォースが完全解放状態になっているだと。これは厄介
だな。」

「シラヌイ殿、アルファフォースの強さがとてつもないことになっています。」

「アルファフォース・ボムドロップキャノン！」

マグマブレイングだけでなく、無差別に発射して攻撃し始めた。

「シラヌイ殿、どうしたんだ。」

「このままでは、バラバラにされて倒されるのも時間の問題だ。船に戻るか。」

しかしその船が攻撃を受けて大爆発した。

「なっ！しまった！ぐううう！」

マグマブレイングの右顔が無くなっていた。

第三十三話 シラヌイの怒り、アルファフォース限界突破（後書き）

次回第三十四話暴走解除！マグマブレイング大爆発。お楽しみに！

しばらく時間が経過した。

「目覚めたかシラヌイ。」

「カンレキ殿。」

「お前は暴走していたが何とか直せた。」

「すみません。私の不意が。」

「いやいいんだ。」

アラートは、シラヌイに何かを言った。

「シラヌイ殿、スガークユという破壊大帝はご存じでしょうか。」

「スガークユ、確かに知っているが・・・」

「彼自体がディセプティコン基地です。」

「なにつ！」

この新たな真実とともに次の展開に向かい始める。

第三十四話 暴走解除！マグマブレイング大爆発（後書き）

次回 第三十五話 第九軍は3つに分割したチーム。お楽しみに！

第九軍編OP主題歌「無邪気なる残酷度」

第九軍編ED主題歌「3・14」走り出した、新生冷静曲」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7032k/>

シラヌイ

2011年11月21日22時43分発行